

響け！ 復興輪太鼓

あの3月11日、石巻市立雄勝中学校は午前中に卒業式を終えていました。ぼくたちは、自宅や友だちの家で卒業式の余韻に浸っていました。その時、今までに経験したことのない大きな揺れと、高さ16mに達した津波に襲われました。ぼくたちは、生死の境目を懸命に逃げました。巨大な津波は、町もぼくたちの家もみんな、みんなのみ込んでしまいました。雄勝地区に住んでいた人は約4,300人でしたが、死者、行方不明者を合わせると200人を超える人が犠牲になりました。ぼくたちが目にした雄勝の町並みは、壊れた校舎がそこに学校があったことを示すだけで、がれきの山と化していました。そんな中で、全員が無事だったのは、まさに奇跡としか言いようがありませんでした。

雄勝中学校の新学期は、壊れた校舎から15km離れた高等学校の教室を借りて、ようやく桜が咲き始めた4月21日に始まりました。ぼくたち51人、誰一人として、制服に身を包んでいませんでした。でも、足もとは光っていました。上靴だけでも新しいものをと、先生たちが友人、知人を頼ってそろえてくださったものでした。学校が始まるのがうれしくて、それ以上は甘えてはいけなさと覚悟していたぼくたちでしたが、一人ひとりのげた箱に入れられた上靴は、足のサイズにピッタリでうれしくなりました。

学校は再開されましたが、生活は「日常」とはかけ離れたものでした。全国からの支援の手が届き始めていましたが、家を流され不自由な避難所からの登校。コッペパン1個と牛乳パック1個が続いた給食。衣食住のどれをとっても不十分で、ぼくたちは生きることでさえいっぱいの状況でした。

「たくましく生きよ。」と、校長先生が新しい校訓を掲げました。校長先生をはじめ先生たちは、どこか寂しさを隠せないぼくたちを支え、勇気づけてくださいました。このままでいいはずがない、何かを始めないといけないと考えていたぼくたちでしたが、先生たちも、ぼくたちが生きる喜びを実感でき生徒みんなと取り組むことができるものを探してくださいました。それは、雄勝に伝わる「伊達の黒船太鼓」でした。先生たちの提案に、ぼくたち全員が大きな拍手で応えました。

まず、始まったのは、太鼓づくりでした。学校の和太鼓は津波に流されていたからです。代わりに、廃タイヤを集め、泥を洗い流し、荷造り用のテープを何重にも貼り皮面にしました。みんなで作業をしながら、ぼくたちは、何かいいことが始まる予感がしていました。太鼓の台は、ベニア板を組み合わせ、色を塗りました。100円ショップの麺棒がばちになりました。和太鼓ならぬ、ぼくたちと先生たちとの“輪”太鼓でした。

6月8日、体育館に集まりました。目の前に“輪”太鼓を並べ、生徒全員そろっての初打ちでした。

ドーン!

本物の太鼓に負けない迫力のある音に、ぼくたちの心は一気にひきつけられました。練習の指導には、「伊達の黒船太鼓」の保存会の人がかけてくださいました。最初は、音もリズムもバラバラでした。

「みんなそれぞれいろんな思いをしてきた。だから最初はバラバラでもいい。とにかく自分の思いを込めて打て。その思いがみんなで太鼓を打ったときに伝わるんだ。」

保存会の人アドバイスに、ぼくたちはありったけの思いを太鼓にぶつけました。津波に追いつかれながら逃げ切った友だちも、一緒に避難をしていたおばあさんが津波に流されてしまった友だちも、お母さんを亡くした友だちも、毎日、毎日たたき続けました。手のひらにまめができて、まめがつぶれて血が出て、51人の心意気を伝えようとたたき続けました。

そして、8月20日、石巻市で開催された「教育夏祭り」が初めての発表の場になりました。地域の人たちだけでなく全国から多くの人が集まっていました。その前で、ぼくたちは、やり場のない怒りや悲しみ、だけどたくましく生きるんだという思いを込めてたたきました。ぼくたちを見ている人たちの目には涙があふれていました。演奏が終わると、割れんばかりの拍手が起こりました。鳴りやまない拍手と涙に包まれて、ぼくたちは演奏をやり終えた満足感を味わっていました。そして、一時の満足感だけではない何か、ぼくたちの心の中で動き出した感じがしました。

あの日から半年が過ぎた9月11日、ぼくたちは、雄勝中学校の校舎と向き合っていました。頭には白鉢巻き、背中に「たくましく生きよ。」とプリントされた黒のTシャツ。あの大津波にのまれ、いつ取り壊しになるかわからない校舎。あの日、卒業式を行った体育館は跡形もなく流され、窓は壊れ、壁は突き破られ、その枠をとどめているだけの校舎。ぼくたちは、その姿を目に焼き付けながら、自分たちが学んでいた震災前の校舎の姿を思い出していました。

家族、地域の人々、先生たちに見守られる中、ぼくたちの代表があいさつしました。

「思い出の詰まった中学校は、心の中に生きています。お世話になったこの校舎に感謝の気持ちを込めて演奏しましょう。」

銅鑼の音とともに、静かに「伊達の黒船太鼓」の演奏が始まりました。

ドーン ドドド ドドド ドン!

腰を落として下半身に重心をかけ、手首だけでなく、ばちと腕を一直線にしてたたきました。じっと前を見つめ、懸命にたたき続けました。みんなの太鼓の音に包まれながら、ぼくたちの心の中には、これまでの出来事が次々と浮かんできました。

あの日、雄勝の町を大津波が襲った
必死に山に向かって、草をつかみ駆け上がった
避難した山の中で、冷たく長い夜をいくつも過ごした
守ることができない命があった
家は流され、町がなくなってしまった
信じられなかった
立ちつくすしかなかった
学校が再開されて、ひとつ、心の支えができた
新しい上履き、うれしかった
たくましく生きる
負けねえど
でも、やっぱりつらくなった
かなわないけど、元の雄勝に戻してほしかった
前に向かって歩いていこう
いただいた支援に恩返しをしたい
心に決めた



石巻市雄勝町被災校舎前
(2011(平成23)年9月11日 撮影：石巻市立雄勝中学校)

ぼくたちの思いを込めた太鼓の音は、大空に広がりました。思い出の校舎にも響きわたりました。

いよいよフィナーレ。

ドンドコ ドンドコ ドンドコ ドン!

「ヨッ!!」

51人の力強い掛け声とともに、真っすぐ空に向かって両手を突き上げ、銅鑼の音を合図に、その手を校舎に向けて力強く伸ばしました。

そして、ぼくたちは、どこまでも真っすぐ前を見つめていました。

私が、彼らの演奏を見たのは、2011(平成23)年11月5日、東京での教育フォーラムに参加したときでした。圧倒されたのは、太鼓の音の大きさではなく、演奏している生徒たちから伝わってくる迫力だったのです。仙台藩主の伊達政宗は、藩とスペインとの貿易を進めようと使節団を派遣しました。「伊達の黒船太鼓」は、大きな夢を持ちながらローマをめざし、航海への不安、つらさ、そして無事にローマまでたどり着いた感激を表現したものです。

私には、雄勝中学校の生徒たちと太平洋にこぎ出す伊達の黒船が重なって見えました。

(石巻市立雄勝中学校 佐藤淳一前校長著「たくましく生きよ。」、石巻市立雄勝中学校 阿部紀子教頭への取材により作成)